

『今月の天候と農作業』

通卷第5608号
10月号
平成29年9月28日発行
宮崎県
宮崎地方気象台



【予報のポイント】

暖かい空気に覆われやすく、向こう1か月の気温は高いでしょう。

前線や湿った空気の影響を受けやすく、向こう1か月の降水量は平年並か多く、日照時間は平年並か少ないでしょう。

【確率(%)】

要素	予報対象地域	低い(少ない)	平年並	高い(多い)
気温	九州南部	10	30	60
降水量	九州南部	20	40	40
日照時間	九州南部	40	40	20

【予想される向こう1か月の天候】

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

天気は数日の周期で変わりますが、平年に比べ晴れの日が少ない見込みです。

向こう1か月の平均気温は、高い確率60%です。降水量は、平年並または多い確率ともに40%です。日照時間は、平年並または少ない確率ともに40%です。週別の気温は、1週目は、高い確率70%です。2週目は、平年並または高い確率ともに40%です。3~4週目は、平年並または高い確率ともに40%です。

<1週目の予報> 10月7日(土)~10月13日(金)

期間の前半は高気圧に覆われて概ね晴れますが、後半は前線や湿った空気の影響で曇りや雨となるでしょう。

※明日から1週間の、日別の天気や気温などは、

週間天気予報 (<http://www.jma.go.jp/jp/week/>) を参照してください。

<2週目の予報> 10月14日(土)~10月20日(金)

天気は数日で変わりますが、前線や湿った空気の影響を受けやすく、平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。

<3週目から4週目の予報> 10月21日(土)~11月3日(金)

天気は数日の周期で変わり、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

普通作物

◆普通期水稻

収穫時期は慌ただしく、一瞬の油断や操作ミスが怪我や事故につながるので慎重に作業しましょう。

1 適期収穫等

収穫適期は不稔粒を除いた全粒数の8割が黄化した時で、ほ場ごとに粒色をよく観察します。収穫前の落水が早すぎると白未熟や胴割の発生を助長するので、収穫5日前までは間断かん水を行い根の活力を保ちます。倒伏すると茶米や穂発芽が発生する場合があるので、刈分けを行い全体の品質が低下しないようにします。風雨でほ場にゴミが流入していると機械の故障の原因にもなるので予め除きます。

2 乾燥調整

高水分の生粒を高温で急激に乾燥すると胴割粒が発生します。熱風温度は40℃以下で、毎時の水分減少は0.8%以下で行い、仕上げの玄米水分は14.6~15%となるようにします。

複数の品種を扱う場合は、機械や袋等の清掃はこまめに行い混米防止に努めましょう。

◆大豆

1 排水対策等

湿害対策として排水溝を整備します。なお、干ばつの時は子実の肥大が悪くなるので、水が確保できる所では畦間に走り水を行います。

2 病害虫防除

カメムシは生育後期まで莢を加害し、被害が激しいと株は収穫時期になっても落葉せず青立ちのままとなります。ほ場を観察し農薬基準を遵守し、防除を行いましょう。

◆ソバ

子実肥大期に入るので、降雨後に停滞水のあるところは追加で排水溝を設けるなど、こまめな管理が重要です。特に水田では周囲に溝を設置すると効果的です。

(荒砂 英人)

施設野菜

◆共通事項

急な冷え込みに備え、暖房機をいつでも稼動できるよう準備しておきます。また内張ビニールの設置は早目に作業を終えます。

燃料を節減するためには、ハウス内の気密性を高めることが重要です。ハウスの外張ビニールに破損や隙間がないか確認します。また、内張ビニールは谷部やサイド部分のつなぎ目に隙間ができやすくなるので、丁寧な作業を心掛けましょう。

◆きゅうり

ハウス抑制栽培は、主枝の収穫期で、早いものでは側枝からの収穫も始まります。側枝の発生を促進するために、やや多めのかん水を行い、主枝の摘心が遅れないよう注意します。追肥の1回目は主枝摘心の1週間前に行い、その後側枝の果実肥大が始まる時期から定期的に施用します。側枝の収穫開始以降は収穫の最盛期を迎えるので、草勢が低下しないよう注意しましょう。また、光線の透過を良くするために主枝の摘心後より中段の葉から順次摘葉を行います。

促成栽培は育苗期の後半から定植時期です。苗床では、徒長しないよう昼間は十分日光にあて、本葉2・5枚以降は昼温25℃前後、夜間は14℃を下限に管理しましょう。

◆ピーマン

促成ピーマンは整枝・誘引期です。この段階での枝づくりは年内だけでなく、全期間の収量を左右するので、注意します。第2分枝を主枝としますが、第3分枝が強い場合は、ねん枝等を行い主枝の伸長を促します。また、着果が多く、草勢が弱い場合には、1~2番果を摘果し、草勢を維持するなど初期の樹体づくりに努めます。かん水は畦全体に十分かかるように行いますが、軟弱徒長を防止するために過度のかん水は控えましょう。

◆トマト

促成栽培の大玉トマト、ミニトマトは定植後、異常茎（メガネ）の発生を抑制するため、かん水量を制限した管理を行っていますが、大玉トマトでは、第1花房の肥大が始まる第3花房開花期、ミニトマトでは、第5花房開花期を目安にかん水、追肥を開始します。かん水は草勢を見ながら行いますが、かん水開始時期が遅れると肥大不良や生理障害等の発生が懸念されるためタイミングを逃さないよう注意しましょう。

◆いちご

今年は、育苗期の高温の影響で炭疽病の発生が多く、定植時期、花芽分化とともに平年並みで、頂花房の発蓄は中旬前後と予想されます。同時期に第1次腋花房の分化期となるので、遅れないようマルチ被覆を行うとともに、追肥を開始します。追肥は10a当たり窒素成分で0.3～0.5kg/日を液肥で施用しましょう。

(黒木 正晶)

葉茎菜類及びいも類

◆台風後の対策

生育の変化に留意しながら、病害防止や草勢回復のため、薬剤散布や追肥・葉面散布を行います。

また、大雨による土壌の流出などで排水口が埋没があるので、排水口の点検・再整備を行います。

◆キャベツ・レタス

キャベツは播種後120日～150日で収穫期を迎えるため、結球具合をみながら隨時収穫します。

レタスは12月出荷を目指す栽培では定植作業、2～3月出荷を目指す栽培では播種期です。生育適温は15°C～20°Cであるため、12月上旬にはトンネル被覆が必要です。

◆たまねぎ

翌春3月以降に出荷する作型の播種期です。本ぼ10aに対し、かん水ができ、排水の良い苗床を50m²用意し、完熟堆肥200kg、苦土石灰8kg、窒素1.8kg、リン酸2.8kg、カリ0.8kg（いずれも苗床50m²あたり）を施用し中旬までに播種します。播種後覆土し、十分にかん水した後は発芽まで乾燥しないよう新聞紙等で覆いましょう。

◆しょうが

低温障害を受けやすいため、降霜の前に収穫を行います。堀り上げたら、できるだけ早く茎を切り落とし、茎やシートで塊茎を覆って乾燥を防ぎましょう。

◆食用かんしょ

5～6月に植え付けたものの収穫期です。食用かんしょは生育日数が130日以上になると過肥大により、いもの形や皮色が悪くなるので、今月中には収穫を終えましょう。

◆さといも

中生種の収穫期です。枯れ上がり症状の見られたほ場や、芽つぶれ症や乾腐病の疑いがあるものは翌年の種芋としては使用しません。

また、今年の疫病の初発には、残さ処理の不徹底によると思われる事例がありました。収穫が終わったさといもの畠の片付けは、残さの分解を進めるためにトラクター速度を遅く、ロータリー回転を早くし、できるだけ細かく破碎します。また、残さを畠付近の空き地に放棄することは決してしないでください。

◆ほうれんそう

加工用は厳寒期に収穫する作型の播種期です。地力が高く、排水の良いほ場を選定し、事前に十分な根域を確保するための深耕や表面排水を促すための排水溝の整備をします。また、除草剤は土壌が乾燥しすぎた状態では効果が劣るので土壌水分が適湿の状態で散布しましょう。

(杉村 幸代)

果 樹

1 常緑果樹

◆極早生温州みかん

収穫が終了した園地では、樹勢回復のために施肥、かん水を行います。収穫後に秋枝が発生すると翌年の花芽が大きく減少するので、発芽が見られなくなる10月中旬以降に実施しましょう。また、窒素成分の葉面散布は樹勢回復に効果が高いため、5~7日間隔で3回以上行いましょう。

◆完熟きんかん

今年は7月中旬以降の花が結実している園が多く、地域やハウスによってばらつきが見られます。昨年よりも結果時期が遅くなっています。結果の遅かった園では、上旬までにビニール被覆を行い、昼間の温度は28℃、夜間は21℃以上を目安に加温することで果実肥大を確保しましょう。また、仕上げ摘果が終わっていない園地は早急に実施しましょう。

◆マンゴー

剪定が7月下旬以降の後期作型園では新梢の発生や充実が遅れている園地が多く見られます。そのような園では、夜間の加温と昼間の高温管理、葉面散布により、新梢の緑化を早めます。

最近、果実の軸腐病の発生が増加しています。樹冠内に残る枯れ枝に発生する黒色の胞子

が軸腐病の原因です。ハウス内の胞子の密度を下げるために加温が始まるまでに枯れ枝を全て取り除きましょう。炭疽病対策と併せて施設内の剪定残さは全て施設外に持ち出しましょう。

2 落葉果樹

◆礼肥施用

収穫後の樹勢回復が不十分だと、翌年の新梢発生や開花結実が悪くなります。根が活発に活動している10月に施肥を行いましょう。

◆くり

収穫後のイガは、病害虫の越冬場所となり、翌年の発生源となるため、土中に埋めるなどして適切に処理しましょう。

(鈴木 美里)

花 き

◆花き全般

10月に入ると夜温が低下してきます。特に中山間地域では急激に低下し、降霜による被害の恐れもあります。施設栽培では保温・加温だけでなく、微生物農薬のダクト散布が実施できるように暖房機のダクトを早めに設置してください。

◆キク

秋ギクの「神馬」は10℃以下の低温に遭遇すると幼若性の獲得により開花遅延を起こす恐れがありますので、早めに加温準備を行い、適正な温度管理に努めましょう。また、年内出荷作型においても親株が高温に遭遇すると、生育中の低温により開花遅延を起こす場合があるので、保温・加温を行いましょう。

◆スイートピー

今月中～下旬に発芽・開花が始まります。草勢が弱い状態で開花・収穫を行うと草勢が著しく低下し、減収の原因になります。中旬までに収穫に耐えられる株づくりを行い、収穫開始は葉の大きさや切り花の品質等から判断してください。

この月は例年、曇天後の強日射や高温による生長点の焼け等、気象の大幅な変動による障害が発生しています。根域を十分に確保するとともに光線管理や換気に気を配りましょう。

◆デルフィニウム

中山間地域で本格的な収穫が始まります。極端にかん水を控えると花のボリュームが低下するので、適宜かん水や液肥を施用しましょう。収穫後の前処理では品質保持剤の濃度、処理時間を厳守します。

平坦地については中旬頃に発芽が始まります。ボリュームを確保するためにかん水・追肥等適切な肥培管理を行ってください。

◆トルコギキョウ

生育初期に乾燥状態になると活着・発根が悪くなるので、十分にかん水しましょう。また、葉先枯れの発生しやすい品種については、草丈が10cm前後の頃にかん水を控え、根系の発達を促し、併せて定期的にカルシウム剤を散布します。

追肥が後半にずれ込むとプラスチングの発生につながるので、初期重点の追肥になるように液肥を施します。

◆キイチゴ（ベビーハンズ）

気温が和らぎ、伸長量が増え、秋の本格的な収穫が始まります。樹勢の維持、来年度の成育確保のため樹勢に応じてシートを残し、その他の規格に達したものは地際から収穫します。葉傷み等で出荷できないものは来年3月に芽吹きでの出荷が可能なため、必要に応じて芽吹き用として残しておきます。

（中村 広）

畜 産

◆家畜

日較差が大きい季節です。子牛、子豚、幼雛は温度変化に特に弱いため注意が必要です。適切な温度管理や換気を行います。

3ヶ月齢までの子牛は、寒さに弱く、腹部が濡れた状態では風邪などを引きやすいので、敷料をこまめに取り替えるなど、牛舎環境を整備します。

乳牛に関しては、10月に入っても暑熱ストレスを受けています。ヒートストレスメーターをチェックし、温湿度指数が67を上回る時は、牛舎ファンを回すなどの暑熱対策を続けます。

養豚では疾病予防のため、豚舎の消毒はもとより、人、車両、物資の消毒を徹底します。

養鶏では、冬場の鳥インフルエンザに備え、防鳥ネットの破れや隙間がないよう点検を行い、野鳥や野生動物の侵入を防ぎましょう。出入り口の消毒、畜舎周辺の石灰消毒なども徹底しましょう。

◆飼料作物

飼料用イネの普通期栽培については、収穫時期を迎えます。糊熟期～黄熟期の収穫適期に適正水分になるよう50～65%でサイレージ調製します。予乾の目安は約1日です。予乾が長すぎて水分量が40%を下回ると乳酸発酵せず、サイレージに調製できないので、乾かしすぎに注意しましょう。イタリアンライグラスやエンバクなどを播種する前には土壌分析を行い、適正な施肥管理（堆肥、化成肥料、苦土石灰、ヨウリン等）を行います。近年、ゲリラ豪雨が観測されています。ほ場に水が溜まると、湿害などにより飼料作物の生育を阻害するため、ほ場に長時間、水が溜まる場合は、排水を徹底しましょう。

（大山 佐喜子）

工芸作物

◆茶

1 秋整枝の実施

秋整枝は、春整枝に比べて芽揃いが良く摘採が3日程度早くなる反面、12月～3月の凍霜害を受けやすいため、防霜施設の有無等、茶園の立地条件と品種の早晚生等を考慮して実施します。

① 整枝の時期

秋整枝は平均気温が18℃以下になる頃を目安に行います。山間地域は9月下旬～10月上旬、広域霧島地域は10月中旬、沿海地域は10月下旬頃となります。

近年、秋冬期の高温で秋整枝後に再萌芽する事例が見られていますが、30cm四方内の再萌芽数が20芽以下であれば収量・品質への影響は無視できます。

一方、秋整枝の遅れによる越冬芽の充実不足は収量・品質に影響がでるため適期を逃さないよう注意しましょう。

② 整枝の高さ

整枝の高さは最終摘採・整枝面から3～5cm上で、葉層を8cm以上確保できる位置で実施します。また、秋と春の2回に分けて整枝する場合は、秋整枝は春整枝より一、二節高い位置で実施します。

2 病害虫の防除

今年はカンザワハダニが多発している茶園が目立ちます。裾刈りや秋整枝後の防除と冬期防除（マシン油）を実施し、ダニの越冬密度低減を図りましょう。

また、県内の茶園でもチャトゲコナジラミの発生が徐々に拡大しています。この害虫は成虫が茶園を飛び回るので、茶園の観察に努めましょう。

なお、本虫に対する問い合わせや見慣れない虫を発見した際は最寄りの農業改良普及センター等へ連絡してください。

（黒木 清人）

◆しいたけ

1 水分管理と環境整備

9～10月は、しいたけの基となる原基の形成が盛んな時期です。この頃の原基づくりがしいたけの発生量に大きく影響するため、ほだ木の水分補給に努めましょう。

また、暗くなったほだ場は間伐や枝打ちを行い、光や降雨の入りやすい明るい環境とともに、風が強く、乾燥しやすいほだ場は防風ネットの設置等の環境改善を行い、ほだ起こしや秋子の発生に備えましょう。

2 原木の伐採

クヌギやコナラは通常10月下旬～11月下旬の間で、葉の3～7割程度が黄葉する時期に伐採するのが適期とされていますが、同じ地域でも、その年の気象条件や立地条件によって伐採の適期が変わります。気象や原木の状況等に注意しながら伐採に向けた準備を始めましょう。

(永野 学)

◆たばこ

本年の通常期販売は来月で終了となります。未出荷の方は出荷するまで適切な貯蔵管理を行うようお願いします。今月は来年作に向けての準備が主な作業です。

1 来年作の準備として、日当り・風通し・排水など、条件の良いほ地を早期に選定しましょう。新作地や借地は事前に前作物の情報収集と土壌検定を実施し、来年作の施肥設計の参考にしましょう。

2 冬期深耕及び耕耘作業は土壌環境改善と病原菌密度低下のための重要な作業です。深耕・耕耘を繰り返し行い、耕種的防除に努めましょう。

3 良質堆肥10a当たり1, 200kg以上の使用に向けて、堆肥材料を確保しましょう。切り返しは適度な水分状態(60%前後)を保ちながら、月1回程度、年7回以上の切り返しを行い、腐熟促進に努めましょう。

4 出荷後は来年の出荷規格遵守に向けて貯蔵庫・作業場の整理整頓及び清掃を行いましょう。

(宮崎県たばこ耕作組合)

内容の詳細について

10月の天候と農作業の詳細内容について。執筆は県農業経営支援課及び森林経営課、宮崎県たばこ耕作組合が担当しています。各作物の病害虫の防除対策、気象災害の事前・事後対策等の詳細は最寄りの支庁・農林振興局(農業改良普及センター)へ。

☆「今月の天候と農作業」はホームページにも掲載しています。

(<http://nougyoukishou.pref.miyazaki.lg.jp>)

向こう1カ月間における農作物の主な病害虫の発生量と防除対策

農作物名	病害虫名	発生量	発生状況と防除対策
野菜・花き類	ハスモンヨトウ等 チョウ目害虫	並	大豆ほ場ではやや多く発生が認められますが、かんしょのほ場およびフェロモントラップ調査による誘殺数は平年並で推移しています。幼虫が大きくなると薬剤が効きにくくなるので、早期発見に努め若齢幼虫期に防除します。
施設野菜全般	土壌病害虫	—	台風等による大雨で圃場が冠水した場合は、土壌消毒の効果がなくなり、疫病や青枯病、線虫等の被害が発生する恐れがあるので、排水対策を十分行うとともに、必要に応じて再度、土壌消毒を行います。
トマト	トマト黄化葉巻病 (TYLCV)	—	いずれのウイルスも、微小害虫（タバココナジラミ、ミナミキイロアザミウマ）によって媒介されるので、施設開口部には必ず防虫ネット（目合い0.4mm以下）を設置し、侵入を防止します。これらの微小害虫は、一旦増加すると防除が難しいので、発生初期の防除が重要です。
ウリ類	黄化えそ病(MYSV) キュウリ・メロン 退緑黄化病(CCYV)	— —	特に、ミナミキイロアザミウマが媒介する黄化えそ病(MYSV)に注意が必要です。
いちご	炭疽病、萎黄病 その他の病害虫	— —	苗床で炭疽病、萎黄病が発病した場合は、その周囲の苗も感染苗と見なし、適切に処分します。また、定植初期からうどんこ病やハダニ類が発生するとその後の多発につながるため、定植前に苗の防除を徹底し、本ぼに病害虫を持ち込まないよう注意します。
果樹全般	果樹カメムシ類	やや多	チャバネアオカメムシ・ツヤアオカメムシともに誘殺数が多く推移しています。 地域や時期によって発生量が大きく変動するので、園内外を見回り早期発見・早期防除に努めます。
カンキツ類 (露地栽培)	黒点病 ミカンハダニ	やや少 並	黒点病は感染源である樹冠内枯れ枝の除去に努めるとともに、降水量が少なくとも1カ月毎の防除を行います。 生息密度が高くなつてからでは防除効果が期待できないので、発生初期（寄生葉率30%、または1葉当たり虫数0.5～1頭）に防除します。 収穫前の早生みかん等では収穫前使用日数等に注意します。
茶	カンザワハダニ ※※	多	防除適期は越冬前の10月中下旬ですが、気象要因による変化が大きいため、茶園を観察して防除の必要性および時期を判断します。 同一系統薬剤の連用を避け、抵抗性の発達防止に留意します。
	クワシロカイガラムシ	やや多	薬剤散布量は成木園で10a当たり1,000リットル程度を目安に、専用噴口を使うなどして枝幹に十分かかるように丁寧に散布します。
	チャトゲコナジラミ	—	成虫は新芽に、幼虫はすそ部古葉に寄生するため、よく観察し防除を行います。

- 「発生量」は、過去10年間の発生量と比較して、今後の発生量がどの程度になるか予測したものです。
- ※※は注意報を発表しています。
- 病害虫防除・肥料検査センターのホームページアドレスは、<http://www.jppn.ne.jp/miyazaki>です。

